町田久成と三井寺法明院

福家　俊彦

町田久成と三井寺法明院

福家　俊彦

Name :
FUKE　toshihiko

Title :
Hisanari Machida and Miidera Houmyouin

Summary :
Hisanari Machida (1838-1897) is known for his work in the preservation of national treasures from the early years of the Meiji Period and his research of those treasures. He was particularly dedicated to establishing museums and is perhaps best known as the first curator of the Tokyo National Museum. In the later years of his life, Machida entered the Buddhist priesthood and became a disciple of Keitoku Sakurai of Miidera Houmyouin just as such famous men as Ernest F. Fenollosa and William S. Bigelow had. In this paper I will introduce some of Machida's lesser-known achievements at Miideara.

はじめに

天台寺門宗の総本山である三井寺（園城寺）には、天台宗の開祖・天台智者大師の尊像画が数本伝来している。その一本は、最澄将来の図像を踏襲した室町時代の古画で、ここで注意を引くのは、箱書きに「町田久成寄附」と記され、町田久成の旧蔵品であった点である(1)。

町田久成（一八三八～九七年）(2) は、日本における博物館の創設に邁進し、東京帝室博物館（現在の東京国立博物館）の初代館長として博物館の歴史に大きな足跡を残した人物として知られ、「明治初期の古美術の保護と研究の先駆者」(3) と評価されている。

久成の生涯で、とくに注目されるのは三井寺山内の法明院住職・桜井敬徳（一八三四～八九年）との仏教を通じての交流である。二人の交わりは、岡倉天心をはじめフェノロサ、ビゲローへと広がり、ことに敬徳への帰依を深めたフェノロサやビゲローは仏門に入り、死後も法明院に墓所を設けるまでにいたっている。久成自身も明治二二年（一八八九）、五二歳のときに敬徳のもとで授戒、官界を辞して三井寺に入っている。

これまで久成については、彼の最大の業績である博物館創設を中心に紹介されてきたが、本稿では久成晩年の事績を跡づける作業を通じて、三井寺における町田久成について素描を試みたい。

一、町田久成の業績

一-一　薩摩から世界へ

幕末に薩摩藩主・島津氏の庶流の家に生まれた町田久成にとって、大きな転機となったのは、慶応元年（一八六五）二八歳のときに薩摩藩の若き俊英たち十五名を率いてイギリスに渡航したことである(4)。およそ二年余の滞在でロンドンをはじめ翌年四月から開催されていたパリ万博にも赴いている。明治維新へと胎動する時代にあって、西洋の近代文明を体感し、大きな衝撃と感動をうけたであろう。それはパリ万博が幕府、薩摩藩、佐賀藩に分かれて参加していた事実が象徴しているように、それまでの日本は、藩や国といった地域に分かれ、人々はそれぞれ生まれた地域の文化を生きており、国民的に統合された日本国が存在していないという事実に起因する問題意識へと久成を促したと思われる。この留学経験が久成をして西洋近代国家と対峙しうる国家としての日本、あるいは国民としての日本人を考えざるを得ない決定的な契機となったことを意味している。のちに久成がなし遂げる博物館創設という仕事と生き様を考える上でも、いわば世界の眺望を獲得していく大きな第一歩となったことは想像に難くない。

一-二　文化財保護と「模写」

久成が帰国したのは、慶応三年（一八六七）六月下旬。この年十月には大政奉還が行なわれ、時代は大きく変わる。

明治政府に出仕した久成が残した最大の業績は、もちろん日本初の近代的な博物館の創設である。その第一歩となるのが、明治四年（一八七一）の「集古館建設の提言」である(5)。この提言は「明治期における文化財保護の歴史の端緒をなすものであり、わが国における博物館建設の必要性を論理的に説いた最初のものとして極めて重要である」(6)。久成は明治初年の神仏分離、廃仏毀釈の烈風が吹き荒れるなか、「厭旧尚新ノ弊風」によって「天下の宝器珍什」といった貴重な文化財が急速に失われていく実態を目の当たりにしていた。そこで久成は、文化財は「考古ノ徴拠」であり、「古今時勢ノ沿革ハ勿論往昔ノ制度文物ヲ考証」することの重要性を説き、その対策として日本における文化財の散逸、破壊を防ぎ、保護、伝承するための博物館（集古館）の必要性を主張した。

ここで注目すべきは、一刻も早く文化財保護の対策を講じなければ、「一歳有餘ヲ打過候ハバ天下ノ古器旧物ハ大概壊滅」してしまうほど事態が切迫しているなか、博物館建設だけでなく「旧物ヲ図面ニ模写致シ羅集編成」すること、いわゆる文化

財を「模写」し、収集することを挙げている点である。その一例として伝わっているのが、「漢委奴国王」で知られる「金印」の模造である(7)。明治五年（一八七二）、旧福岡藩主黒田公が久成邸を訪れて実物を示した。久成は大いに驚き厳重に保存されるとともに皇室に奉納すべく篆刻家の益田香遠に依頼して模造品を制作したという。後述する梵鐘の模鋳や『古逸叢書』の事例を考える上でも、この時点で久成が「模写」の重要性を正確に認識していたことは特筆すべきことである。

一-三　博物館という制度の創出

久成の提言は、翌月に「古器旧物保存方」の公布として実現し、翌年に始まる社寺宝物調査（壬申検査）へと結びつくことになる。明治六年（一八七三）には、いよいよ博物館創設に向け、決定的となる上野寛永寺跡地に「大博物館建設の必要」の建議が行なわれる。大久保利通の強力な主導のもとで進められる富国強兵、殖産興業の旗印のもと久成の望む博物館への道程は決して平穏なものではなかった。それでも久成は、博物館もまた殖産興業に資するべしとの方針に、ときに抵抗しつつ、これを巧みに利用し「国策である殖産興業を目的とする内国勧業博覧会の開催と博物館建設作業を連動させ、博物館史料の確保と公開施設（博物館）の創設に向った」(8)のである。そして明治一五年（一八八二）三月、ついに博物館の開館にこぎ着け、自ら初代の館長に就任することになる。

明治政府の美術行政の柱となったのは、殖産興業としての美術工芸品の振興、美術教育制度の確立、そして古美術（古器旧物）の保護であった。ことに古美術を保護、収蔵して展示する博物館や美術館の創設、それは人々の眼差し、見ることを規範化する制度としての施設、いわば「文明の装置」を人々の目に見える形で提示することを意味していた。(9)

また、美術教育の分野において岡倉天心やフェノロサによって明治二〇年（一八八七）に設立された東京美術学校もまた博物館同様、美術教育という制度を通じて国家の成員たる新しい日本国民を創出することでもあった。

二、三井寺入寺以後の町田久成

二-一　桜井敬徳との出会い

明治一五年（一八八二）一〇月一九日、久成は突如として三月に開館したばかりの博物館の館長を辞任する。(10)そして翌年四月には、三井寺法明院の住持・桜井敬徳から八斎戒を、さらに東大寺戒壇で円頓菩薩戒を受け、仏門に入る。

明治一八年（一八八五）には元老院議員となるが、このころより久成の向島小梅の別邸には、岡倉天心をはじめフェノロサやビゲローが足繁く訪問し、敬徳も上京の折りには町田邸に止宿していたという。彼らは敬徳の説く仏教に深く関心を寄せ、ことにフェノロサとビゲローは、同年九月に町田邸において敬

徳から戒を授かり、仏門に入ることになる。岡倉天心もまた翌年五月に法明院において敬徳から授戒している(11)。

久成のもとに集まった岡倉天心、フェノロサ、ビゲロー、そして敬徳たちに通底していた意識は、やはり「日本とは」、「日本人とは」という根源的な問いかけであったように思われる。それはフェノロサが『美術真説』において「美術の制度化」として新しい日本画の創出を主張したように各々立場の相異はあるといえ、その向う方向には共通するものがあったであろう。そこで誰もが直面した最大の課題は、たとえばフェノロサの日本画にしても「明治初期においては、福沢諭吉が『学問のすゝめ』四編（一八七四年）で指摘したように、「日本には唯政府ありて未だ国民あらず」という状況にあったのだ。ここに指摘されている国家形成と国民形成のギャップこそ「日本画」が求められるゆえんであり、また、それが生み出される場だったのである。この時点では、国民は「日本画」がそうであるように未来に属していた」(12)という事態であった。まさに日本と日本人の問題が横たわっていたのである。

二-二　三井寺入寺

久成は明治二二年（一八八九）一二月一日、敬徳に従い剃髪、大乗菩薩沙弥戒を受け、出家後直ちに東京に戻り、浅草橋場の本邸と向島小梅の別邸を処分している。さらに同月一四日に敬徳が死去するや二六日には元老院を辞して三井寺に入っている。久成自身、いつごろから、どれほど仏教に関心を寄せていたのかは判然とはしないが、一貫して文化財の保護に携わってきた久成にとって、当時の寺院や僧侶のおかれた情況については多くを見聞していたと思われる。(13)

明治を迎えて政治体制が急激かつ全面的に一変し、それまで普遍的なものと信じられていた価値観が否定され、宗教的伝統や美的判断の基準も絶対的ではなくなるという大変動のなかで、誰もが一人の人間として経験できる内容だけでは、社会全体の在り方を把握することが困難な時代に生きなければならなかった。仏教の世界に生きる僧侶たちにとっても事情は同じで、久成が帰依した敬徳も同じ問題を抱えていたであろう。

それは敬徳が、明治一九年（一八八六）に『義瑞和尚行業記』(14)を版行したことにも顕れている。法明院の開祖・義瑞（一六六七～一七三七年）は、幕藩体制下のもと安定期を迎えた十八世紀初頭に仏教の復興改革を訴えた僧で、敬徳自ら版行の趣旨を記した後記に「源頭に活水有り、則ち下流自ずから清し、津路誤たず、則ち彼岸に達す可し、我山律幢之再振、義瑞和尚の主唱と為す…（中略）…復古之業、殆ど其功を全うす」と記し、法明院創建の意義を「律幢之再振」、「復古之業」と捉えている。敬徳自身やはり明治初期の混迷の時代にあって、本書を公刊することにより自らの法脈の「源頭」である義瑞の足跡を振り返り、再認識を促すことによって当時の仏教の存在、その行く末を人々に問いかけたかったのであろう。さらに久成との関係で

注目されるのは、版行に当たって久成が印刷代金を立替えたと推測される点である(15)。

また、久成自身も『敬徳大和上略伝』を著わしている。本書は敬徳没後二年、三回忌に当たる明治二四年（一八九一）一二月一四日にあわせて刊行されたもので、敬徳を「先師」と呼び、自らを「小弟」として敬徳の業績が宣布されることを願っている。

久成は文化財の保護や博物館にとどまらず、新時代に処しかね、心の寄る辺を失って混迷する人々にとって仏教信仰、それは旧来の仏教ではなく未来を見据えて改革が同時進行している仏教にこそ、「日本人」の人心を統合する可能性を見ていたのではないだろうか。

二-三　崇福寺再興と梵鐘の模鋳

明治二三年（一八九〇）三月、久成は三井寺光浄院の住職に就任すると同時に荒廃していた崇福寺（志賀山寺）の兼務住職となり復興を託されることになる。

崇福寺は天智天皇によって大津京時代に創建された古刹で、法明院開祖・義瑞によって一度は再興されたが、当時はまた荒廃し、敬徳も再興を望んでいたという。明治二一年（一八八八）の敬徳から久成宛の書簡では、工事が進んでいたことをうかがわせるが(16)、久成は敬徳の遺志を嗣いで、東京大学史料編纂所蔵の『町田久成略伝』(17)によると「八万四千の白衣観音の願筆を揮毫し、以て世の喜捨財を蒐め、一大梵鐘の鋳造を企図す」とあり(18)、これをもって崇福寺復興の資金に充てようとしていたことが分かる。

また、明治二五年（一八九二）三月に「志賀山寺町田久成」の名で発行された「志賀山再建并梵鐘浄財募縁」（三井寺所蔵文書）にも鋳造する梵鐘の図とともに寄附人や世話人の名前が記されている。この梵鐘の図からも企てられたのは、現在も三井寺に伝わる重要文化財の銅鐘を模鋳することであった。この見本となった鐘は、遼の太平一二年（一〇三二）に制作された朝鮮鐘で、宝相華と唐草文を配し、美しい天人像が陽鋳された優品として知られている。ここにも久成が「集古館建設の提言」以来、「考古ノ徴拠」である優れた文化財を模写することの重要性の主張が貫かれているのを見ることができよう。白衣観音の揮毫も然り、まさに久成は「書を能くし、天性画技に長じ、且つ鑑識に富み、篆刻は天才に造詣深く、模造模写を巧みにす」(19)と略伝が伝えるとおりであった。

さて、崇福寺の梵鐘として模鋳された鐘は、その後数奇な運命をたどる。鋳造後しばらくは光浄院に置かれていたが、昭和三年（一九二八）に再建された法明院の鐘楼に懸けられ、第二次世界大戦中に供出、幸いにも鋳つぶされることなく戦後返還されて円満院に仮安置されていたが、現在は所在不明となっている。

二-四　久成の古書籍蒐集と『古逸叢書』

崇福寺再興のため発願された梵鐘で特筆されるのは、久成が明治二三年（一八九〇）に三井寺の開祖智証大師一千年遠忌にあたり、この鐘の銘文を黎庶昌（一八三七～九七年）に依頼したことである。この銘文は、黎庶昌の文集『拙尊園叢稿』巻六に「崇福寺鐘銘」として収められている(20)。黎庶昌は、貴州省遵義の出身で、曽国藩の幕僚となり、明治一四年（一八八一）に駐日清国公使として来日した人物である。文人として名高く、在日中には、中国国内ですでに散逸した古典籍を収集し、楊守敬（一八三九～一九一五年）とともに明治一七年（一八八四）に『古逸叢書』二六種二〇〇巻にまとめ刊行したことはよく知られている。

久成は出身地の名をとって「石谷」と号し、古美術をはじめ古典籍の蒐集家としても知られていた。崇福寺の鐘銘を依頼した黎庶昌との関係では、久成が所蔵していた平安後期の古写本『天台山記』が、『古逸叢書』に収められ影印出版されている。『天台山記』は唐代の八二五年に徐霊府が撰述した地誌で、久成旧蔵の写本は現在、国立国会図書館が所蔵し、他に伝本のない孤本として重要文化財に指定されている。その包紙には「安然先德真蹟、天台山記、星使、黎庶昌古佚叢書中へ、収、石谷珎蔵」の墨書があり、久成が手に入れ珍蔵していたものを黎庶昌の『古逸叢書』に収められたことが判明する(21)。また同じく『古逸叢書』に収められた『大宋重修廣韻』も久成旧蔵本で(22)、久成の蔵書の質の高さとともに、これまであまり指摘されてこなかった黎庶昌との関係は注目されるところである。

おわりに

明治三〇年（一八九七）、前年から体調を崩していた久成は、九月一五日に上野公園の韻松亭で世を去る。享年六〇であった。三井寺では功績に酬いるため権大僧正の僧位を贈っている。直ちに寛永寺津梁院に内葬された後、遺言により三井寺に送られ、法明院墓地のフェノロサの墓所と向かい合う場所に埋葬された。墓碑には「本実成院権大僧正久成大和上墓」と刻まれている。

現在、東京国立博物館の庭園に顕彰碑が建っている。久成の十七回忌に当たる大正元年（一九一二）に親交のあった井上馨や杉孫七郎たちによって建立されたもので、歴史学者の重野安繹が碑文を撰している(23)。その末尾には「龍に攀じ鳳に附く、雲台麟閣は、我願に非ず、我何くにか適わん、兜率天こそ安宅」とあり、三井寺の本尊でもある弥勒仏の浄土である兜率天に安住することを願った久成に言及している(24)。

明治政府の高官の地位を棄て、仏門に飛び込んだ町田久成。世人から「近世の一奇人なり」(25)と称された生涯は、世界の中で激変していく明治の日本にあって、薩摩藩の名家出身としての矜持と近代国家を担う日本人としての使命との狭間を生きた彼独特の自己韜晦の一表現であったといえば深読みしすぎで

あろうか。

なお、町田久成の関係文書とみられる資料が、三井寺山内の勧学院から聖教類とともに発見されている。今後は本資料の整理、研究を課題としたい。

写真２：アーネスト・F・フェノロサ

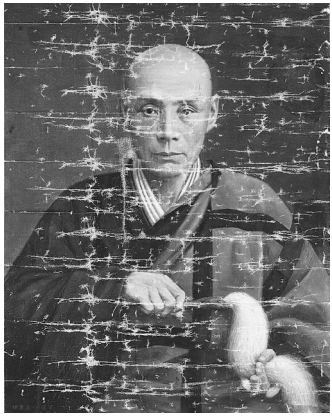

写真１：町田久成肖像（三井寺法明院蔵）

写真４：町田久成の墓（三井寺法明院墓地）

写真３：桜井敬徳像（三井寺法明院境内）

写真６：東京国立博物館構内に建つ顕彰碑

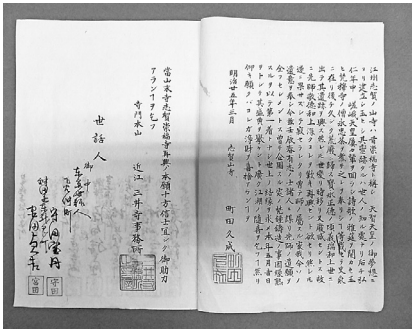

写真５：町田久成の志賀山再建并梵鐘浄財募縁

写真７：寛永寺津梁院の供養塔

註

（1）絹本著色・天台大師画像（一二四・六×七一・〇センチメートル）。その箱書きに「町田久成寄附　天台大師画像　古画　園城寺蔵」（箱蓋）、「明治四十四年十二月　假箱寄附　光浄院暹暻」（箱底）の墨書がある。

（2）町田久成の生涯については、末尾掲載の「町田久成関係略年譜」を参照。その他、主な論著に東京国立博物館『東京国立博物館百年史』（一九七三年）、門田明「町田久成略伝」『鹿児島県立短期大学紀要』第四八号（一九九七年）、関秀夫『博物館の誕生　町田久成と東京帝室博物館』（岩波新書、二〇〇五年）、椎名仙卓『日本博物館成立史　博覧会から博物館へ』（雄山閣、二〇〇五年）、井上洋一「町田久成」（『博物館学人物史（上）』所収（雄山閣、二〇一〇年）、吉田千鶴子『〈日本美術〉の発見　岡倉天心がめざしたもの』（吉川弘文館、二〇一一年）などがある

（3）佐藤道信『明治国家と近代美術』（吉川弘文館、一九九九年）四〇・四一頁

（4）犬塚孝明『薩摩藩英国留学生』（中公新書、一九七四年）

（5）前掲『東京国立博物館百年史』

（6）前掲『博物館学人物史（上）』

（7）門田明前掲論文並びに「町田石谷先生碑銘」磯ヶ谷紫江『墓碑史蹟研究』第九巻（後苑荘蔵版、一九三二年）

（8）前掲『博物館学人物史（上）』

（9）北澤憲昭『眼の神殿「美術」受容史ノート』（ブリュッケ、二〇一〇年）、とくに第三章参照

（10）辞任の事情については前掲『博物館の誕生　町田久成と東京帝室博物館』一五九～一六〇頁参照

（11）フェノロサと法明院に関する主な論著は、山口靜一『フェノロサ』（三省堂、一九八二年）、同氏『三井寺に眠るフェノロサとビゲロウの物語』（宮帯出版社、二〇一二年）並びに源豊宗・滋野敬淳『三井寺法明院』（観光資源保護財団、一九七五年）

（12）北澤憲昭『「日本画」の転位』四六頁（ブリュッケ、二〇〇三年）

（13）後藤純郎「博物局書籍館長、町田久成　その宗教観を中心として」『教育學雑誌』第一〇号（日本大学教育学会、一九七六年）

（14）元文三年（一七三八）に門弟寛温等による『義瑞和尚行業記』

（15）大島朋剛「博物館退官後における町田久成の事績」『ＬＯＴＵＳ』第二六号（日本フェノロサ学会、二〇〇六年）

（16）大島朋剛前掲論文

（17）門田明前掲論文

（18）『ながらのさくら』（一九二七年）二三・二四頁並びに写真版一三

（19）門田明前掲論文

（20）石田肇「園城寺朝鮮鐘と崇福寺鐘銘　町田久成と黎庶昌」『史迹と美術』第

五八輯ノ七（五八七号）（史迹美術同会、一九八八年）

(21) 薄井俊二による一連の論考に詳しいが、徐霊府『天台山記』については、「天台山をめぐる古文献逸文輯考」（『中国文化』第六〇号、二〇〇二年）、「徐霊府「天台山記」の研究（その一）（『埼玉大学紀要教育学部』第五十一巻第一号、二〇〇二年）、「天台山記の流伝」（『日本中国学会報』第五十五集、二〇〇三年）。国立国会図書館蔵「天台山記」については、同氏の「徐霊府「天台山記」の研究（その二）（『埼玉大学紀要教育学部』第五十一巻第二号、二〇〇二年）、「国立国会図書館蔵「天台山記」について（『汲古』第四一号、二〇〇二年）、「再び国立国会図書館蔵「天台山記」について」（『汲古』第四四号、二〇〇三年）。これらはまとめられ薄井俊二『天台山記の研究』（中国書店、二〇一一年）として出版されている。それによると『天台山記』は、智証大師円珍によって日本に将来され、写本が作られて延暦寺の経蔵に収蔵されていた。その後、寺門派の成尋が書写して入宋時に携行している。久成旧蔵の国立国会図書館所蔵の写本（二五・五×一五・五センチメートル）は、五大院安然が関わった写本として伝わり、三千院円融房の所蔵を経て、久成の架蔵するところとなり、『古逸叢書』に模刻された後に帝室図書館の所蔵となり、現在に至っている

(22) 石田肇前掲論文

(23) 前掲「町田石谷先生碑銘」

(24) 滋野敬淳「町田久成和尚小話」『ＬＯＴＵＳ』第一七号（日本フェノロサ学会、一九九七年）

(25) 『大津市志』上巻（大津市私立教育会、一九一一年）及び『近江人物志』（滋賀県教育会、一九一七年）

町田久成 関係略年譜

西暦	年号	歳	関連事項	参考事項
一八三八	天保　九	1	一月二日、町田久長（伊集院郷石谷領主〈鹿児島市石谷町〉）と母国（汲）子（吉利郷〈日置市日置町吉利〉領主・小松清穆長女）の長男として鹿児島城下千石馬場通り、町田屋敷にて出生	
一八五六	安政　三	19	母死去、遺言により江戸昌平坂学問所に就学、有馬新七と出会う	
一八五九	安政　六	22	江戸就学を終え薩摩に帰郷。御小姓組番頭となる	
一八六二	文久　二	25	島津久光により大目付に抜擢される（島津斉彬は一八五八年に死去）	
一八六四	元治　元	27	六月、薩摩藩開成所の設立に参加、小松帯刀（家老）、町田久成（大目付・学頭）、大久保一蔵（側役）連名 七月、禁門の変に六郷隊（兵士約六百人）隊長として参戦	
一八六五	慶応　元	28	三月二二日、薩摩藩英国留学生十五名を率いて英国渡航に出発	
一八六七	慶応　三	30	六月下旬、英国より帰国 一〇月一四日、大政奉還	四月、パリ万博に日本（幕府、薩摩藩、佐賀藩）が初参加
一八六八	慶応　四	31	一月、新政府に出仕、外国事務局の参与兼外国事務局判事 二月、長崎裁判所判事兼九州鎮撫使参議 五月五日、外国官判官事となる。翌日に従五位下に叙せらる	三月二八日、神仏分離令 九月、「明治」に改元
一八六九	明治　二	32	七月八日、外務大丞 七月二二日～八月二二日、英国エジンバラ公アルフレッド来日の接待役（領客使随使）を務める 九月二九日、七日間の謹慎処分を受ける	
一八七〇	明治　三	33	九月二日、大学大丞となる、大学南校物産局勤務の時、田中芳男（幕府使節としてパリ万博参加）と再会	
一八七一	明治　四	34	四月二五日、「集古館建設の提言」日本初の博物館創設計画の始まり 五月五日、田中芳男と共に東京招魂社大祭にあわせ三番薬園にて物産会を開催 七月一八日、文部省設置に伴い文部大丞 九月二九日、文部省に「博物局」設置、博物局掛に任命される	五月二三日、古器旧物保存方公布（太政官布告）

一八七二	明治五	35	一月五日、文部大丞・町田久成、田中芳男と共に万国博覧会御用掛として事務局に出向 一月八日、太政官正院に「澳国博覧会事務局」開設 五月一五日、社寺宝物調査（壬申検査）開始（町田久成、蜷川式胤、高橋由一、横山松三郎） 八月二八日、博覧会事務局を内山下町の旧薩摩藩邸跡に移す 名古屋城等保存ノ儀を建議	三月一〇日、国内初の勧業博覧会（湯島聖堂大成殿・文部省博物館）
一八七三	明治六	36	三月一九日、「博覧会事務局博物館」と改称 内山下町博物館（集古館）の始まり 四月一五日、内山下町の「博覧会事務局博物館」で博覧会を公開 六月五日、太政官に上野寛永寺跡地に博物館と書籍館の「大博物館建設の必要」を建議 一二月一〇日、内務大丞となる	ウィーン万博に初の正式参加（五月一日～十一月二日） 十一月一〇日、内務省設置（初代内務卿大久保利通）
一八七四	明治七	37	七月三〇日、書籍館の書籍を浅草米倉に移し、「浅草文庫」とする 米国博覧会事務局局長に就任	五月二日、古墳発見ノ節届出方（太政官達五九号）
一八七五	明治八	38	三月三〇日、博覧会事務局博物館を「博物館」（内務省所管）と改称 五月三〇日、博物館は「内務省第六局」と改称、局長に就任	一二月一七日、「浅草文庫」を一般に公開
一八七六	明治九	39	一月四日、内務省第六局が「博物館」と改称、七日に博物館長となる 二月二四日、内務省所轄の博物館のみ「博物館」と称す（太政官布達第二〇号） 一二月一四日、寛永寺本坊跡地二九、八〇〇坪を博物館建設用地として確保（内務省博物局管理）	四月一九日、遺失物取扱規則布告（太政官布告第五六号） 五月、フィラデルフィア万博開幕（十一月一〇日まで）
一八七七	明治一〇	40	九月二七日、埋蔵物発見の場合、内務省に届け出義務を布達	八月、第一回内国勧業博覧会
一八七八	明治一一	41	三月一四日、寛永寺本坊跡に博物館本館建設に着工（コンドル設計）	五月一四日、大久保利通暗殺 八月九日、フェノロサ来日
一八七九	明治一二	42	結婚、三男一女（蝶子）をもうけるも妻と長男は早世	
一八八〇	明治一三	43	二男・秀麿誕生、本邸・浅草橋場、別邸・向島小梅	
一八八一	明治一四	44	一月二七日、博物館竣工 四月七日、農商務省設置、内務省博物館局並びに博物館の移管に伴い内務省・博物局長から農商務省・博物局長に就任	三月、第二回内国勧業博覧会黎庶昌、駐日清国公使として来日（～八四年）

一八八二	明治一五	45	三月二〇日、農商務省「博物館」開館、初代館長に就任 六月、勲四等正五位 一〇月一九日、博物館長（博物局長）を辞任 三男・茂誕生	六月五日、ビゲロー、モースと共に来日
一八八三	明治一六	46	四月三日、三井寺法明院・桜井敬徳から八斎戒を受ける 一〇月二七日、博物館（史伝課長）に復帰	
一八八四	明治一七	47	六月二日、東大寺戒壇で敬徳より円頓菩薩戒を受ける	『古逸叢書』刊行
一八八五	明治一八	48	三月一〇日、博物館より元老院義員に転出 五月、勲三等 八月、桜井敬徳上京、向島小梅の町田邸に止宿、岡倉覚三の紹介でフェノロサしばしば訪問す 九月二十一日、向島小梅の町田邸においてフェノロサ（諦信）とビゲロー（月心）、敬徳から戒を授かる 十月、従四位	
一八八六	明治一九	49	桜井敬徳が『義瑞和尚行業記』を版行するに際し印刷代金を立替える 三月二四日、宮内省「博物館」として移管 五月三〇日、岡倉覚三、法明院で桜井敬徳より授戒	
一八八七	明治二〇	50	一〇月、東京美術学校設立（事実上の校長は岡倉天心）	黎庶昌、再来日（～九〇年） 十二月六日、島津久光死去
一八八八	明治二一	51	一月、宮内省「図書寮付属博物館」 九月、宮内省に臨時全国宝物取調局設置（委員長九鬼隆一）	
一八八九	明治二二	52	五月十六日、宮内省「博物館」を「帝国博物館」と改称、九鬼隆一が総長に就任 一二月一日、三井寺にて敬徳に従い剃髪、大乗菩薩沙弥戒を受ける 出家後、東京に戻り、浅草橋場の本邸と向島小梅の別邸を処分する 一二月十四日、敬徳、東京にて死去、五五歳 一二月二六日、元老院を辞し、三井寺に入る	二月十一日、大日本帝国憲法公布 五月、パリ万博開幕（フランス革命百周年）

一八九〇	明治二三	53	三月二一日、大僧都補任（遍照僧正の古例に依る） 三井寺光浄院住職、また崇福寺復興のため兼務住職となる 九月、崇福寺再興のため園城寺蔵の朝鮮鐘の模鋳を発願し、鐘銘の執筆を大清欽差大臣・黎庶昌に依頼 一〇月二七日より三日間、智証大師一千年遠忌を修する	七月六日、フェノロサ帰国 九月、ボストン美術館着任
一八九一	明治二四	54	一二月一四日、『敬徳大和上略伝』を著わす（奥書）	五月十一日、大津事件
一八九二	明治二五	55	三月、「志賀山再建并梵鐘浄財募縁」（三井寺所蔵文書）を作成し、崇福寺再興のため梵鐘鋳造の募金を行なう また当時、直隷総督・北洋大臣であった李鴻章が金塊を寄贈 六月一五日、志賀山寺再建を発願し願筆白衣観音像分布会を設立	
一八九三	明治二六	56	長吏祐玉を拝し、円頓菩薩比丘戒を受け、大僧となる シカゴ万国博覧会の世界宗教会議参加のため秀麿を伴い渡米	シカゴ万博（五月～十月）
一八九四	明治二七	57		八月、日清戦争
一八九五	明治二八	58		四月、帝国奈良博物館開館
一八九六	明治二九	59	この頃、体調を崩し、寛永寺明王院で療養	七月六日、フェノロサ再来日
一八九七	明治三〇	60	九月一五日、上野公園・韻松亭で死去、六〇歳、寛永寺津梁院に内葬 権大僧正に贈補、遺骸を送柩し、法明院墓所に埋葬（土葬） 墓碑銘「本実成院権大僧正久成大和上墓」	五月、帝国京都博物館開館 六月一〇日、古社寺保存法（法律第四九号）
一八九八	明治三一		九月、一周忌に際し、津梁院墓地に供養塔建立	
一九一二	大正元年		十七回忌に際し、東京国立博物館に顕彰碑「町田石谷君碑」建立	

成安造形大学附属近江学研究所紀要　第５号

発行日　平成28年３月24日

発　行　学校法人京都成安学園　成安造形大学　附属近江学研究所
〒520-0248　滋賀県大津市仰木の里東４-３-１
電話　077-574-2118

発行者　木村 至宏

編　集　成安造形大学附属近江学研究所

印刷所　宮川印刷株式会社

©Seian University of Art and Design 2016

ISSN 2186-6937